

# 歴史的観光地におけるダイナミズムの協奏

—岡山県倉敷市を事例に—

A harmony of different dynamisms at Kurashiki.

片山 明久

## 要旨

歴史的観光地では、当地の歴史そのものの持つダイナミズムが、観光のシーンにおいて様々な展開する。それは、長野県妻籠や奈良県今井町に見られるような町並み保存を中心とした展開や、奈良県奈良町に見られるような古い街並みと新しい文化の融合を試みる展開など、その地域によってそれぞれの特徴が見られる。本稿では岡山県倉敷市を事例に、歴史と芸術という2つのダイナミズムが、互いに影響を与えあいながら協奏的に展開してきた史実を辿り、それが現代の観光シーンにどのような魅力を生み出しているかについて考察する。

考察の方法としては、次のように進めてゆく。まず倉敷の歴史を概観し、この地の商人が資産家になっていった経緯をつかむ。そして戦後、彼らを中心に市民と行政が協力して、歴史的な町並みと民芸に「美」的価値を見出し、これを保護していった活動を見てゆく。このように倉敷の歴史のダイナミズムの展開を理解した後、倉敷に存在するもう一つのダイナミズムである芸術の展開について見てゆく。考察対象としては、設立当初より倉敷における芸術の中心的存在であった大原美術館を挙げる。まず創設者である大原孫三郎が、館の創設に込めた思いを考察し、継承者である大原總一郎がそれをどのように発展させていったのかを理解する。その上で現在の大原美術館の活動を概観し、そこに芸術のダイナミズムが現在においても継承・実践されていることを確認する。これらの考察の下、倉敷の観光のシーンにおける歴史と芸術という2つのダイナミズムの協奏がもたらす魅力について説明を行い、これらふたつのダイナミズムの関係は、コラボレーションというひと時の協同ではなく、永続的な、安定感のある、静かな協奏であると指摘し、これを本稿の結論とした。

キーワード： 歴史、芸術、ダイナミズム、歴史的町並み、民芸、大原美術館

## 1. はじめに

本稿では岡山県倉敷市の美観地区（伝統的建造物群保護地区）を事例に、歴史的観光地における歴史のダイナミズム<sup>1</sup>の展開、並びにそれが生み出す観光地としての魅力について論じてゆきたい。

倉敷は歴史的な観光資源を持つ観光地の中でも、人気の高い観光地のひとつである。特に倉敷川周辺的美観地区にはその観光資源が集中しており、多くの観光者が訪れる場所となっている。町並みには白壁が続き、歴史を感じさせると共に、現在も住民が居住している家屋が多いことから、静かな生活感が感じられる場所でもある。また町並みと同様に、多彩な民芸品も魅力のひとつである。倉敷特産の藎草を使った工芸品、酒津の良質の粘土を材料にした焼き物、地元の綿花を使った綿製品など地元素材を使用したものが中心である。本稿では第1に、以上に挙げた倉敷の歴史的町並みと民芸品にスポットを当てて、これらの歴史的文化的資源が作り出す魅力について論じることにする。

さてもうひとつの倉敷美観地区の大きな観光資源としては、多彩な美術館や民芸館などの文化施設が挙げられるだろう。中でも大原美術館は、まさにその中心的存在である。2009年度（平成21年度）の美観地区の総観光客数は314万人であるが、そのうち34万人（10.8%）の観光者が大原美術館を訪れている。大原美術館が一般大人1,000円の入館料が必要な有料施設であることを鑑みるとその集客力は強力であり、美観地区の観光におけるその存在は非常に大きいと言えるだろう。また大原美術館は、このように多くの観光者が訪れる観光資源であると同時に、その展示や活発な活動において日本の美術館界をリードする芸術の発信基地でもある。本稿では第2に、この大原美術館を採りあげ論じることにする。

これら倉敷美観地区の歴史的文化的資源や大原美術館は、決して当初のまま自然に現代に存続している訳ではなく、先人の思いが積み重なって継承され現在の姿をなしているものである。そこには、歴史的町並みと民芸という歴史的文化的資源のダイナミズムと、大原美術館が発信する芸術のダイナミズムという2つのダイナミズムが存在していると思われる。

倉敷美観地区における観光の魅力とは、まさにこの2つのダイナミズムが共存し、

<sup>1</sup> 「ダイナミズム dynamism」という言葉は、一般的には、”The mode of being of force or energy; operation of force. Now usu., energizing or dynamic action, energy, ‘drive’” *The Oxford English Dictionary, second edition, 1989*. あるいは、”great energy, force, or power, vigor” *The Random House Dictionary of The English Language, second edition, 1987* などに見られるように、「力強さ、活力のある様」といった意味に理解できる。英和辞典では「動力、活動力 (energy); (ある方向に) 駆り立てる力(drive); (芸術作品などが) 人を感動させる力、力強さ、迫力」*研究社新英和大辞典, 2002*, 「力強さ、活力、迫力」*ランダムハウス英和大辞典, 1994*, 「活発さ、力強さ」*ジーニアス英和大辞典, 2001*, という意味とされている。本稿では「ダイナミズム」という言葉は、歴史が観光者をある方向に駆り立てたり、感動させたりする力という意味を主に置き、「作用力」という意味で使用する。

協奏している姿なのではないだろうか。この仮説に対する説明を試みることを、本稿の目的としたい。そして倉敷美観地区の観光の魅力に対する理解を深めたいと思うのである。

## 2. 倉敷の歴史的文化的資源と観光

### 2.1 倉敷の歴史

論を進めるにあたり、まず倉敷全体の歴史を概観しておきたい。

倉敷は、古くは周辺に児島、水島等の島々を持つ阿知瀬と呼ばれる内海であったため、交通の要所として栄えていた。戦国期に入ると領主の宇喜多氏が高梁川河口に堤防を築いたために新田開発が可能になり、倉敷は農業の面でも非常に栄えることになった。大阪冬の陣(1614年:慶長19年)では、倉敷湊は兵糧基地となり重要性を増していったため、1642年(寛永19年)には幕府の直轄地(天領)となった。天領には運上金<sup>2</sup>や冥加金<sup>3</sup>が軽減される恩恵があり、また綿や菜種、藷草(イグサ)の栽培、塩田開発も進んだため商人たちは資力をつけ、幕末には巨額の富を蓄える資産家(大原家など)が現れるようになった。

明治時代に入ると、倉敷市周辺は紡績産業の一大集積地となり発展を遂げた。1930年(昭和5年)には市内中心部の倉敷川畔に大原家により大原美術館が開館、1934年(昭和9年)には倉敷市を含む「瀬戸内海国立公園」が他地区に先駆けて指定されるなど注目を集めた。

太平洋戦争後は、水島地区に臨海工業地帯が推進され、倉敷市は重化学工業地帯として注目されることとなった。1972年(昭和47年)には新幹線の岡山への乗り入れが始まり倉敷へも観光客が急増し<sup>4</sup>、特に倉敷川周辺的美観地区が注目を集めるようになった。その後、1988年(昭和63年)の瀬戸大橋の開通と山陽自動車道の整備<sup>5</sup>、1997年(平成9年)の倉敷チボリ公園の開園(2008年閉園)等があり、倉敷の観光はそれらによって影響を受けることになったが、現在も魅力ある歴史的観光地としてその存在価値を示している。

<sup>2</sup> 江戸時代の雑税の一種で、商業・工業・運送業・漁業・狩猟などに従事する者に対して課せられた。一定の税率を定めて納めさせるものであった。『日本史大辞典』pp.816 平凡社 1993

<sup>3</sup> 江戸時代、山野河海などの利用の代償として、また営業を許されることの代償として幕藩領主に支払われた雑税。小物成・運上に対し新たに賦課されるもの。『日本史大辞典』pp.535 平凡社 1993

<sup>4</sup> 新大阪から以西は「山陽新幹線」と呼ばれることになった。また、JR(当時は国鉄)では、1970年より「ディスカバー・ジャパン」という個人旅行者の増加を目的とするキャンペーンを行っており、倉敷はその格好のディステーションとなったのである。

<sup>5</sup> 瀬戸大橋は、倉敷市下津井と香川県坂出市を結ぶ10本の橋の総称である。倉敷市中心部からは自動車でも僅か30分の距離であるため、開通後の観光客の増加は著しく、1988年の観光客数は前年に比べ100万人以上の増加となった。

## 2.2 倉敷の歴史的町並み

それでは、倉敷（本論では倉敷美観地区について論じてゆくので、以降は倉敷美観地区のことを指して単に「倉敷」と表記することにする）の歴史的な文化資源を理解する上で最も象徴的と思われる歴史的町並みと民芸について、主にその歴史的背景を見てゆきたい。

倉敷の歴史的町並みは、江戸時代前期に生まれ後期に発展・整備されたもので、倉敷川の周辺、鶴形山の南麓の本町・東町に見られるが、これらの町並みは戦後の「日本中、日本建築はこわして洋館にという風潮<sup>6</sup>」において、ともすれば危機的な状況に陥る可能性があった。この時期に早くも、地元の資産家であり芸術への造詣の深かった大原総一郎は、1948年（昭和23年）に倉敷民芸館を、1950年（昭和25年）に倉敷考古館を、古くからの土蔵を改装して開館したのである。日本が戦後復興に終始し伝統文化の保護にまだ気を配れない状況の中で、町並みの「美」的価値を積極的に評価し、その保存を地域に、日本にアピールした先駆的な行動であったと言えるだろう<sup>7</sup>。

その後の高度成長期の中で、倉敷市では、「洋風・和風の渾然一体となった美観地区」を観光の目玉として観光客の誘致を図る構想が浮上し（倉敷市史研究会1994:第7巻:496）、1968年（昭和43年）に「倉敷市伝統美観保存条例」が公布された。この条例は、同種の条例としては金沢市に次いで全国で2番目のものであり、歴史的な町並みの保存を明文化した画期的なものであった。その後も倉敷市は、1978年（昭和53年）に「倉敷市伝統的建造物群保護地区保存条例」を定め、翌年「重要伝統的建造物群保護地区」の選定を受けるなど、町並み保存を積極的に推進していったが、全国的に最も注目を集めたのは「倉敷市倉敷川畔伝統的建造物群保護地区背景保全条例」であった。

1990年（平成2年）に持ち上がった美観地区周辺の高層ビル三棟の建設計画に対し、倉敷市は、景観への配慮を建築主に求める代わりに、もしもその対処により建築主に損失が出る場合は、市が買取や損失補償・経費助成なども行うことができるという内容の条例を制定したのである<sup>8</sup>。全国に起こりつつあった景観条例の中でも、内容的に新しい次元に踏み込んだ初の条例であり、後の景観法（2005年施行）を促したのもあった。

以上に見たように倉敷の歴史的町並みは、戦争という大禍の後も、そこに「美」を再確認し保存と修復に尽力した活動家たちやその後の条例の整備などの努力によって、

<sup>6</sup> 「民家や町並は全国的に早くから建築家と民藝の人達の注目の的だったのですが、日本中、日本建築はこわして洋館に洋館にという風潮で、残念です。—後略—」昭和24年1月、倉敷町並保存第1回座談会における日本民族建築学会会長佐藤重夫の発言 『実録倉敷町並物語』 pp.43

<sup>7</sup> 米連合軍総司令部の経済研究家ローゼンフェルト、英進駐軍の海軍大佐ジェームズ・エイ・ダウン、日本学士院客員エドモンド・ブランデン、バウハウス運動の創始者ワルター・グロピウスなど、この時期に倉敷を訪れた多くの外国人も古い町並みの「美」的価値に賞賛の言葉を残し、保存の必要性を訴えている。

<sup>8</sup> その結果、高層ビル三棟のうち二棟が高さを下げると共に建物の色彩・仕様などの市側の要望も受け入れることで認可され、もう一棟は建設を中止し市が用地の買取を行うことで決着した。

その価値を現代に残してきた。言い換えれば、歴史的町並みという倉敷におけるひとつの象徴を中心に、先人たちから現代に至るまでの様々な人達の思いの結集したものが現在の姿であるとも言える。そして今日、倉敷を訪れる観光者に静かな観光の魅力を与える作用力（ダイナミズム）を発揮しているのである。

### 2.3 倉敷の民芸

次に倉敷におけるもう一つの歴史的文化的資源として、民芸の歴史的背景を見てゆきたい。

民芸という言葉は、国語辞典で「庶民の生活の中から生まれた、郷土的な工芸。実用性と素朴な美とが愛好される。大正末期、柳宗悦らの造語（広辞苑第五版 1998）」とあるように、思想家であり美学者でもあった柳宗悦の造語である。そこでは、「実用性」があると共に「郷土的」であることが指摘されている。工芸における郷土色や地方色は、当地の天然素材を活用することで生み出される。倉敷における代表的なそれは、藺草（イグサ）であった。

倉敷では古くから藺草の栽培が行われ、藺草製品は職人たちの代表的な産業であったが、昭和に入り国内向けの敷物として金波織という商品が開発されていた。それを柳宗悦が見る機会があり、柳はそれを非常に評価し、図案の指導にあたった。これが現在の、倉敷緞通（くらしきだんつう）である<sup>9</sup>。

倉敷緞通の誕生には、このように柳宗悦が大きな関わりを見せるが、大正末期から昭和初期にかけて柳の周辺には民芸に対する思いを同じくする陶芸家河井寛次郎や濱田庄司、そして後に倉敷民芸館館長となる外村吉之介が集っていた。そして1932年（昭和7年）、濱田庄司の展覧会をきっかけに倉敷紡績社長大原孫三郎と柳が出会い、大原はこれを機に民芸運動を積極的に支援してゆくのである。

これ以降倉敷における民芸の発展には、これら柳や民芸館に関わる人たちが大きく関与してゆくことになった。代表的なものとしては、酒津焼、木工、備中和紙、倉敷ガラス、花筵<sup>10</sup>などに対してである。そしてこれらは現在も、優れた民芸品として実用的な土産物になり、また実用美の鑑賞の対象ともなって倉敷を訪れる人々を楽しませているのである。

このように、倉敷における民芸は、古くから地元の天然素材を使って作り上げてき

<sup>9</sup> 倉敷緞通は、藺草と綿糸を使い昔ながらの織機で手織りされた敷物で、数十年の使用に耐えるほどの丈夫な製品である。形状は卓上コースターからマットまで様々であり、観光者の土産品としても人気のある商品となっている。具体的には、酒津焼（柳宗悦、濱田庄司、河井寛次郎、陶芸家バーナード・リーチ、陶芸家富本憲吉らが来窯指導）、木工（画家児島虎次郎が講師を招き、日常用の家具、盆、箱などを作成）、備中和紙（外村吉之介の指導）、倉敷ガラス（岡山県民芸協会坪井一志の進言によりガラス職人小谷眞三が完成させる）、花筵（芹沢銈介、外村吉之介が図案する）などである。

た職人たちの技術に、柳宗悦をはじめとする実用の美の探究者が出会うことで、その価値を高めてきた。そして歴史的町並みと同様に、今日の観光者に観光の魅力を与える作用力（ダイナミズム）を発揮しているのである。

本章では、倉敷の歴史的文化的資源を理解する上で最も象徴的と思われる歴史的町並みと民芸について、その歴史的背景を見てきた。

そこには、先人の価値観や、地元の自然といった礎となるものを大切にしながら、各時代の人達が思いをつないで価値を高めてゆく姿が見える。そしてその求心力となったものが、大原總一郎や来倉の外国人たち、並びに柳宗悦が指摘した生活や実用の中に宿る「美」の存在であった。そして更に「美」への思いは、保存活動に留まらず、その後の背景条例（＝景観美）という新しい美的概念にも発展していったのである。

以上の考察から、倉敷の歴史的文化的資源のダイナミズムは、このような生活や実用の中に宿る「美」を目指して、各時代の人達が思いをつなぐことで形成されてきたものである、ということ本章の結論としたい。今日我々が目にする倉敷の歴史的町並みや民芸品は、このダイナミズムの結晶であり、先人たちからの思いのこもった贈り物と言うことが出来るかもしれない。

### 3. 大原美術館 —芸術のダイナミズム—

#### 3.1 大原美術館の概要

本章では、倉敷の観光において、歴史的町並みなど伝統的生活文化と並びもうひとつの大きな魅力となっている大原美術館について見てゆくことにする。

大原美術館は、1930年倉敷紡績・倉敷絹織社長の大原孫三郎が私財を投じて建設した、民間美術館である。孫三郎の後は息子の總一郎が館を引継いだ。現在は財団法人大原美術館が経営する形態になっており、總一郎の長男謙一郎が理事長に就いている。館の立地は倉敷川の南に面しており、倉敷美観地区の中心となる場所である。歴史的な町並みの中心地に位置する西洋建築の美術館という、日本の中でも非常に珍しい存在であると言える。

大原美術館の魅力は様々に語られる。西洋絵画をはじめ、日本の絵画・彫刻、工芸館、東洋館、古代美術に及ぶ幅広いテーマ性、またゴッホやマチスなど世界的に認められた名画の数々、さらに古い町並みに違和感の無い建築物としての価値など、その魅力は多方面から語ることが出来る。しかしながら本論で注目するのは、大原美術館の現代における躍動的な活動についてである。それは結論から言うならば、大原美術館の最大の魅力が、創業者の大原孫三郎、そして總一郎の思いを深く理解しそれを精力的な活動を通じて現代に展開している強い作用力（ダイナミズム）にある、と考

えるからである。以下、この点に対する説明を試みるために、まず大原孫三郎、總一郎の活動と思いを見てゆきたい。

### 3.2 社会への奉仕の心 —大原孫三郎の時代—

倉敷紡績・倉敷絹織社長の大原孫三郎は、なぜ当時まだ日本で類を見なかった西洋美術館の建設を行ったのだろうか。結論から言うならば、そこには孫三郎が終生支援を続けた児島虎次郎<sup>11</sup>の遺志の継承と同時に、社会への奉仕の心という志が存在していたのである。

大原孫三郎は、1880年(明治13年)児島屋と称した倉敷の豪商の家に生まれた。学生時代に東京に遊学するが、放蕩を尽くして倉敷に戻される。更生の日々を過ごす中、石井十次<sup>12</sup>に心酔し、社会に対する奉仕の心が芽生えるようになった。その後孫三郎は、児島虎次郎と出会い終生の盟友となる。そして児島の進言に基づき、日本初となる西洋美術館の建設を行ったのだった。

孫三郎はその生涯に、大原美術館の建設のほか、民芸運動への支援、岡山孤児院への援助、倉敷日曜講演会の開催や大原奨学会の創設をはじめ、実に様々な領域で社会への奉仕という志を実践してきた<sup>13</sup>。

これらの社会貢献活動を見ると、そこには2つの思いが感じられる。ひとつには、世の中の貧困、教育機会の欠乏、労働の非効率、医療の不備など社会の諸問題に対して、それを少しでも改善したい、そしてその解決策を研究するべきである、という思いである。資産家に生まれし者として、孫三郎はこのような社会活動は自らの責任と考えていた。

もうひとつは芸術に関するものであり、先の社会貢献のためにも芸術は有効である、芸術にはその力があり、それを開花させる必要がある、という思いである。大原美術館の建設、民芸運動への支援、倉敷文化協会の創設、といった活動は、まさにそのような思いに裏打ちされたものであった。孫三郎は書画骨董、茶の湯、造園、建築など

<sup>11</sup> 画学生であった児島虎次郎は孫三郎が創設した大原奨学会の受給者として孫三郎に出会ったが、孫三郎は虎次郎の才能を高く評価し、終生の友人となった。画家となった虎次郎は大原家の援助の下二度の渡欧を果たし、大原美術館の主要な所蔵作品を直接収集した。虎次郎は西洋美術館の設立を孫三郎に進言したものの、病に倒れその完成を見ることは出来なかったのである。

<sup>12</sup> 児石井十次はクリスチャンで医学生でもあり、さらに岡山孤児院を経営していた。石井の集会での演説を孫三郎が聞いたことから親交が生まれ、それ以降孫三郎は岡山孤児院を援助し、自らの社会奉仕活動を始める事になる。代表的なものを列挙すると、倉敷商業補修学校(1902年:明治35年)、倉敷教育懇話会(1902年:明治35年)、大原奨学会(1914年:大正3年、大原奨農会農業研究所、現岡山大学自然生物科学研究所)、大原社会問題研究所(1919年:大正8年、現法政大学大原社会問題研究所)、倉敷文化協会(1921年:大正10年)、倉敷労働科学研究所(1921年:大正10年、後、日本労働科学研究所~財団法人労働科学研究所)、倉紡中央病院(1923年:大正12年、現倉敷中央病院)、若竹の園(保育園、1925年:大正14年)などの施設並びに組織の創設であった。

第一級の趣味人であり（井上 1998 : 117）、芸術が教育に、社会に、人々の情操に与える作用力（ダイナミズム）を厚く信頼していた。そしてこれを育むことも、大きな社会貢献活動であると考え、様々な実践を行ったのであった。このような孫三郎の社会への奉仕の志と、芸術のダイナミズムへの信頼は、息子總一郎に受け継がれてゆくことになる。特に總一郎の芸術のダイナミズムへの信頼は非常に厚く、大原美術館はその思いを受けて広範かつ先進的な活動を行うことになるのである。

### 3.3 芸術のダイナミズム ー大原總一郎の時代ー

1941年（昭和16年）、大原總一郎は倉敷紡績(株)の社長に就き、大原美術館においても、總一郎の主導が始まることになった。その後、大原美術館は様々な面で美術館としての充実を図ってゆくことになるが、それは總一郎の芸術に対する思いが大きく投影されたものであった。そこには、孫三郎の抱いた社会貢献への志を継承してはいるが、それ以上に芸術の持つ力（ダイナミズム）に対する絶対的な信頼があったと思われる。總一郎はその信頼を自ら体感し、確信するために、絵画、造形、民芸、音楽といった様々な芸術に常に接し、深い次元の見識を得て、世にその論評を著し、それを活動に繋げていった<sup>14</sup>。

戦後になると總一郎は、早くも1946年（昭和21年）に大原美術館で美術講座を開催し以後半年後ごとに継続させた。また同年に岡山県民芸協会も発足、1948年（昭和23年）には倉敷民芸館も開館させた。そして1950年（昭和25年）には大原美術館開館20周年記念行事として記念講演、記念座談会を行った。またこの折に、芸術大使として来日中だったパリ音楽学校教授ラザール・レヴィが名画の前でピアノ演奏を行い、大きな感動を与えた。

この開館20周年記念行事を機に大原美術館は様々な活動を開始したのだが、それ以降の一連の活動には、總一郎の明確な思いが存在していたと思われる。それは、同時代作家への熱いエールを込めた支援であった。

大原美術館では、開戦前にもゴッホ「アルビーユへの道」やピサロ「りんご狩り」を購入しており、戦後になっても1951年（昭和26年）から「アンリ・マチス展」「ピカソ展」「ブラック展」などを続けて開催すると共に、ピカソ「頭蓋骨のある静物」、ブラック「裸婦」、ルオー「呪われた王」などの作品を購入を再開し、世界的に認められた名画の収集は館の規定路線として存在していた。

<sup>14</sup> 總一郎は、絵画や造形といった美術以外にも、民芸、音楽、動植物などに深い造詣を持つ教養人（柳沢 2009 : 6）であった。『大原總一郎随想全集』は全4巻となっているが、内訳は『第1巻 思い出』『第2巻 自然・旅』『第3巻 音楽・美術』『第4巻 社会・思想』となっており、彼の多方面にわたる教養を表している。



しかし一方で総一郎は、1951年(昭和26年)「現代フランス美術展 サロン・ド・メ  
ェ日本展」の開催と作品購入、1956年(昭和31年)アンフォルメルと呼ばれる前衛的  
な作家達の作品の購入、その後のミロ、カンディンスキー、デ・キリコなどの抽象・  
非具象絵画の收藏、またその後もフォートリエ、フォンタナ、フランシス、ポロック  
などの同時代で前衛的な作品を中心に収集を進めていった。更に、1970年前後には東  
京国際版画ビエンナーレ、現代日本美術展、神戸須磨離宮公園現代彫刻展などに大原  
美術館賞を設け、作品を買い取りするなど同時代の作家への支援を行った。「大原美術  
館は同時代の、それも革新的な作家たちを收藏する美術館というイメージを強めて(柳  
沢 2009: 20)」いったのである。

総一郎はどのような意図で、このような活動を行っていったのであろうか。

総一郎に、よく知られる以下の言がある。

「美術館は倉庫のようによんだ単なる陳列場であるのではなく、常に生きて  
成長していなければならない。」

(「大原美術館の歩み」朝日新聞 1961(昭和36年)6月12日)

総一郎は、美術館とは常に現代性を保ち進化するものでなければならぬと考えて  
いた。同時代の、それも新たな価値創造を行おうとする作家達への支持は、まさにこ  
の言に見る総一郎の芸術に対する理念に基づいていたものと言うことができるだろう。

## 4. 協奏するダイナミズム

### 4.1 現在の大原美術館の活動

前章では大原美術館について、孫三郎と総一郎の主な活動とその思いを中心に見て  
きたが、本項では現在の大原美術館の活動を知ること、孫三郎～総一郎が根底的に  
信頼していた芸術のダイナミズムが、どのような形で現代に表れているのかを見てゆ  
きたい。

まず館の展示場を見てみると、総一郎亡き後(1968年(昭和43年)永眠)も、東洋館、  
児島虎次郎室、オリエント室、分館地下展示室整備、本館増設など、拡張と整備が精力  
的に続けられた。收藏作品においても、モディリアーニや、モネなどすでに世界的に  
も評価の高い作品の購入もあったが、近年は21世紀以降に制作された作品を主に收藏  
しており<sup>15</sup>、前節で述べた同時代作家への評価と支持が継続していると思われる。こ

<sup>15</sup> 直近となる2009年(平成21年)と2007年(平成19年)の記録を見ると、合せて27点が購入  
されたが、そのうち2000年以降に制作された作品が26点、それ以前のものが1点と、同時代の  
作家の作品が収集の中心になっていることが分かる。(財団法人大原美術館事業報告書より)

のように近年においても、大原美術館では美術館の基本的な整備と拡充は着実に進められている。しかし近年の活動の特徴は、むしろ館内の美術品展示以外の活動に現れていると思われる。

開館 20 周年記念行事のひとつとして総一郎が企画した名画の前でのコンサートは、1982 年 (昭和 57 年) 以来「ギャラリーコンサート」という定期コンサートに生まれ変わった。現在では年に 4 回が実施され、2010 年 (平成 22 年) 11 月末現在で 120 回を数える定着した企画となっている。教育活動としては「チルドレンズ・アート・ミュージアム (チルミュ)」が注目を集める。2002 年より始まったこの企画は、夏休み期間に子どもたちを対象に行われ、延べ約 4,000 名が参加する。プログラムは多彩であり、絵の登場人物になる、絵から自分が感じた物語を作る、彫刻を身体全体で触って感じるなど 10 を越えるプログラムが、一般鑑賞者の脇で実施されている。また先に触れたように戦後間もない頃から始められた「美術講座」は 2010 年 (平成 22 年) で 36 回を数え、毎回 300 名を超える聴講者を集めている。

倉敷という地域を意識した活動も、多彩に行われている。教育活動の一環として行われている様々なワークショップには“倉敷を知る”というシリーズがあり、2010 年 (平成 22 年) の企画として「倉敷建物探訪 (全 3 回)」がある。この企画は、建築の専門家を講師に迎えて、大原美術館そのものや倉敷の歴史的な建物を見学して回るものである。更に、「倉敷の器を知る」という企画もあり、大原美術館の所蔵作品の鑑賞や町の中にある美しい器を探して歩き、最後に倉敷で作られた茶器を使ってお茶を楽しむという内容になっている。そこでは倉敷の町並みと民芸という、最も倉敷の歴史が現代に生きているものが題材とされている。

また AM 倉敷 (Artist Meets Kurashiki) と、ARKO (Artist in Residence Kurashiki, OHARA) という事業も特徴的なものである。AM 倉敷 (Artist Meets Kurashiki) は、写真やビデオなどの映像作品、パフォーマンスやイベント型の作品を手がける作家たちを倉敷に招いて、滞在から得た発想や刺激を基に制作してもらう事業であり、倉敷のまちと現代の芸術家をつなぐひとつの試みでもある。また ARKO (Artist in Residence Kurashiki, OHARA) は、「若手作家の支援」「大原美術館の礎を築いた洋画家児島虎次郎の旧アトリエ：無為村荘の活用」「倉敷からの発信」をコンセプトに、滞在制作と、完成作品の大原美術館での公開を行う (大原美術館ホームページより) ものであり、2005 年 (平成 17 年) の津上みゆき (洋画家) より毎年アーティストを選定し、招聘している。この活動も、倉敷のまちと現代の若手の芸術家をつなぐものであると言えるだろう。

以上に見たように、大原美術館は現代においても、否、現代になってさらに活動の領域を広め、芸術のダイナミズムを多方面に発揮している。

今一度、總一郎の言葉を思い返してみる。

「美術館は倉庫のようによどんだ単なる陳列場であるのではなく、常に生きて成長していなければならない。」

(「大原美術館の歩み」朝日新聞 1961 (昭和 36 年) 6 月 12 日)

芸術には常に生きて成長してゆけるだけの潜在力がある、だからこそそれを育み、使命を果たしてゆかねばならないのだ、という芸術のダイナミズムに対する深い信頼を表した言葉と理解できよう。大原美術館は、總一郎亡き後も、さらに力強く芸術のダイナミズムを実践しているということができらるう。

#### 4.2 協奏するダイナミズム —その観光における魅力—

本稿ではここまで、歴史的町並みと民芸という歴史的文化資源のダイナミズムと、大原美術館が発信する芸術のダイナミズムという 2 つのダイナミズムについて論じてきた。

それではこれらのダイナミズムの共存は、倉敷の観光のシーンにどのような魅力をもたらしているのだろうか。本論では、以下の 3 点を以って説明を試みたい。

第 1 に、デュアル (二重) であるという魅力が挙げられる。倉敷の観光を表す際に頻繁に使用される「白壁のまちと美術館」という文言は、まさしくこれを凝縮して表したものである。この魅力は以下の 3 点に表れると思われる。

ひとつには、観光対象がデュアルであるため、観光者はそこにモノトーンでは出せない味わいの深さを感じることができる。単に一時代の歴史文化を味わう観光地では得られない魅力である。そして味わいのバランスは個人に委ねられる。したがって観光者は、倉敷に自分の価値観に応じた観光の魅力を手ら構築し、感じる手が行いやすい。倉敷がマスツーリズムの価値観に飲み込まれなかつた強靱性は、この点に根ざしていたと言えるかもしれなない。

次に「白壁のまちと美術館」、すなわち歴史的観光地における「西洋絵画が極めて充実した美術館」という存在は、日本に類を見ないものである。存在自体が希少であり、観光者にとっては唯一無二の価値を持つものである。またここには、大原美術館が民間美術館であることの意義が重なる。民間美術館であればこそ、日本に未だその価値が定着していなかつた西洋絵画黎明期に建てられた訳であり、現代においても早くから同時代作家の支援を行なうなど日本の美術界の最先端を行く存在でありつづけているのである。すなわち「白壁のまちと美術館」というコントラストは翳りを見せないのである。

そして最後に、デュアルであるが故に、常に新しい魅力が生まれてくるという点が挙げられる。これは先に考察したように、倉敷の歴史的文化的資源と大原美術館が、単に現存しているだけではなく、各々にダイナミズムを持った存在であることが基になっている。現在でもダイナミズムが発揮されているからこそ、新しい魅力を生むパワーがある。先に事例として挙げた、AM倉敷 (Artist Meets Kurashiki) や、ARKO (Artist in Residence Kurashiki, OHARA)、また“倉敷を知る”というシリーズといった一連の取り組みは、それ自体が直接観光アトラクションとなる訳ではないが、まちの魅力を着実に底上げする活動であると言えるだろう。

さて2つのダイナミズムがもたらす第2の魅力には、歴史的文化的資源と美術館がいずれも「美」に関わるものであることから生まれるまちの統一感、が挙げられる。先に述べたように、倉敷の歴史的町並みは全国に先駆けて景観、即ち景観美にその価値を置いた。また民芸は実用の中に見出された美が、その価値となった。このように倉敷の歴史的文化的資源は、「美」に大きな価値観を置いたものである。そのため観光者は倉敷を観光する時、各所で様々な「美」に出会うことが出来る。先に述べたように、大原美術館が古い町並みの中の西洋建築の美術館というデュアルな味わいを感じられる存在でありながら、もう一方で不思議に周囲との違和感がないのは、景観に配慮した材質を用いた建築上の工夫もあるが、何よりも観光者が倉敷のまち全体に通奏低音のように流れる「美」の旋律を聞き取っているからではないだろうか。また「美」の発見は極めて個人的な作業であり、観光者は「美」を求め自ら新しい発見を行ってゆくことになる。倉敷は、このように観光者の探究心を掻き立てる魅力を有しているとも言えるだろう。

第3に、歴史的文化的資源と美術館が各々にダイナミズムを持った存在であるが故に、相互の関係に永続性があり、まちに安定感のある魅力を生み出しているという点である。第1の魅力として述べたように、デュアルであるということはまちの味わい深い魅力を生み出すが、片方の要素が何等かの事情で消滅したときには、その魅力は消えざるを得ない。しかしながら倉敷の歴史的文化的資源と美術館は、各々のダイナミズムの延長線上に現在がある存在なので、その関係性は太く、永続的である。倉敷を訪れる観光者の多くは大原美術館を訪れる。あるいは訪れずとも倉敷川沿いのミュージアムショップで、喫茶エル・グレコでその「美」の一端に触れたり、また大原美術館の外観を目にしてその壮麗な雰囲気を感じたりする。そして白壁の町並みを巡り、民芸品などを楽しむ。倉敷を訪れようとする観光者の抱くイメージはこのようなものであり、それは安定的に提供される。その上に観光者は、先に述べた自らの価値観に基づく「美」の発見を行ってゆくのである。逆に言えば、自らの発見を描くためには安定感の有るキャンパスが必要であり、倉敷のまちはそれを提供していると言えよう。

このように倉敷における歴史的文化資源と大原美術館の関係は、コラボレーションというひと時の協同ではなく、ふたつのダイナミズムが出会い、共に尊重しあった次元で生まれる、永続的な、安定感のある、静かな協奏であると言えるのではないだろうか。

## 5. おわりに

本稿の最後として、2010年11月に行われた大原美術館80周年記念のランプシェードイベントを挙げたいと思う。

大原美術館は2010年に開館80周年を迎えたが、その記念イベントとして11月7日に、かねてから子どもたちや入館者に作成してもらっていた約5000個の和紙のシェードを、中にキャンドルを入れて大原美術館から倉敷川一帯に並べたのである。またこの日は岡山県各地で行われていた国民文化祭の最終日にあたり、倉敷市芸文館で閉会式が行われる日でもあった。孫三郎の干支にちなむ龍の模様に並べられたキャンドルは、頭の部分が大原美術館の中庭に描かれ、胴の部分は倉敷川沿いに伸び、尾の部分が倉敷市芸文館までに至る壮大なアートとなった。当日は行楽シーズンの日曜日ということもあって多くの観光者が、このアートを目にすることになった。

歴史的町並みと美術館、その中を貫く倉敷川、そしてそこに並べられた備中和紙のランプシェード。それは2つのダイナミズムの協奏が現実の形になった貴重な瞬間であった。ランプの光は数時間で消えるものであったが、2つのダイナミズムの協奏が灯した光は、これからも永く観光者を魅了するものであるだろう。

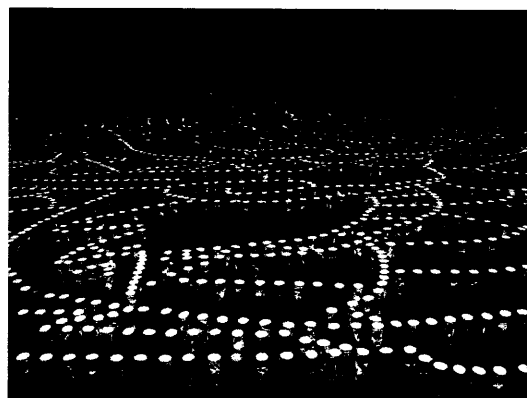
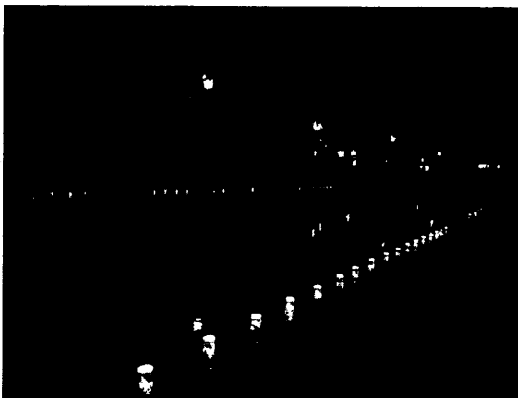


写真1 敷川とランプシェード(大原美術館80周年記念イベントにて)

(左:倉敷観光ウェブサイトより転載、右:筆者撮影)

《参考文献》

- 1 井上太郎『大原總一郎ーへこたれない理想主義者』中央公論新社 1998
- 2 今村新三『大原美術館ロマン紀行』日本文教出版株式会社 1991
- 3 大原謙一郎「地方から考える異文化理解ー世界が本当の日本と出会うためにー」『NEWSLETTER』国際交流基金日米センターvol.22 2003
- 4 大原總一郎『大原總一郎随想全集 3 音楽・美術』『同全集 4 社会・思想』福武書店 1981
- 5 『大原總一郎年譜』『大原總一郎年譜ー資料編』株式会社クラレ 1980
- 6 大原孫三郎傳刊行会『大原孫三郎傳』中央公論事業出版 1983
- 7 片山明久「歴史的観光地における「歴史のダイナミズム」に関する一考察」同志社大学大学院総合政策科学研究科修士論文 2011
- 8 兼田麗子『大原孫三郎の社会文化貢献』成文堂 2009
- 9 倉敷市史研究会『新修倉敷市史第2巻ー古代・中世』『同第3巻ー近世(上)』『同第4巻ー近世(下)』『同第5巻ー近代(上)』『同第6巻ー近代(下)』『同第7巻ー現代』『同第8巻ー自然・風土・民俗』『同第12巻ー史料 近代(下)・現代』『同第13巻ー美術・工芸・建築』山陽新聞社 1994
- 10 倉敷都市美協会編『実録 倉敷町並物語』手帖舎 1990
- 11 山陽新聞社『夢かけるー大原美術館の軌跡』山陽新聞社 1991
- 12 柳沢秀行「始まる前のルネッサンス」「大原總一郎の日本近代洋画収集」『大原總一郎の美術館創造』大原美術館 2009
- 13 「財団法人大原美術館事業報告書平成21年度」「同平成20年度」「同平成19年度」財団法人大原美術館 2007ー2010

《参考ホームページ》

- 1 大原美術館ホームページ <http://www.ohara.or.jp> (2010.12.08 アクセス)
- 2 岡山県ホームページ<http://www.pref.okayama.jp/> (2010.12.08 アクセス)
- 3 倉敷市観光ウェブサイト  
<http://www.city.kurashiki.okayama.jp/dd.aspx?menuid=1849>  
(2010.12.08 アクセス)
- 4 倉敷市ホームページ<http://www.city.kurashiki.okayama.jp>  
(2010.12.08 アクセス)
- 5 倉敷タウン <http://www.kurashiki-town.com/history/> (2010.12.08 アクセス)
- 6 倉敷緞通公式ホームページ <http://kurashikinote.jp/kd-top.html>  
(2010.12.08 アクセス)